

豊中の図書館の未来を考える シンポジウム

目次:

シンポジウムの目的・
実施概要 ……1

第1部
基調講演 ……2

第2部
パネルディスカッション ……3

豊中市では、令和3年(2021年)2月に「豊中市(仮称)中央図書館基本構想」を策定し、令和4年度(2022年度)には、同構想を推進し新たな図書館サービス網を示す「豊中市立図書館みらいプラン」を策定します。

未来の豊中市の図書館像について市民の皆様とともに考える機会とするため、講演とパネルディスカッションによるシンポジウムを開催しました。あわせて、パブリックコメント実施中の「豊中市立図書館みらいプラン(素案)」について説明を行いました。

開催日時 令和5年(2023年)1月21日(土) 13:00～15:30

参加方法 ①会場参加:豊中市すこやかプラザ 1階多目的室
②オンライン(Zoomによるライブ視聴)

参加者 ①会場参加:62人 ②オンライン:46人 計108人

プログラム

時間	内容	講演者・登壇者等
13:00～	開会	
	「豊中市立図書館みらいプラン(素案)」の説明	読書振興課職員
	【基調講演】 これからの公立図書館について	伊丹康二さん (武庫川女子大学准教授)
休憩(10分間)		
14:00～	【パネルディスカッション】 豊中らしい 新しい「図書館」について 1. 近年の他都市における図書館について 2. 豊中の図書館で大切にしてきたこと、これから大切にしたいこと～市民の立場から 3. 豊中らしい新しい図書館について	進行: 伊丹康二さん パネリスト: 豊田高広さん (フルライトスペース(株)特別研究員) 天瀬恵子さん (豊中市立図書館協議会委員) 須藤有美 (教育委員会事務局読書振興課長)
	閉会	



第1部【基調講演】これからの公立図書館について

講演者：伊丹康二さん
(武庫川女子大学准教授)

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了。豊中市政研究所(現・とよなか都市創造研究所)研究員、大阪大学大学院助教を経て、現職。研究テーマは、公共施設の再編手法、郊外住宅地の住環境整備手法など。



を経ています。プール跡地の広場やプール管理棟が用途を特定しないスペース「余白」となって、新しい活動が生まれています。社会が求める用途の変化に対応できる施設づくりが必要だと考えます。

2. これからの公立図書館

公立図書館の動向

- ・ 本は、さまざまなジャンルやテーマとつながることができるアイテムであるため、情報や人の交流のハブになります。改めてその価値を見直す時期ではないでしょうか。
- ・ 公共施設の配置によってまちの骨格がつけられるとすれば、教育だけではなく文化の核になる図書館の配置は大変重要なテーマになります。

図書館に求めるもの

- ・ 数年前に実施した郊外住宅地の住民向けのアンケート調査で、安い値段で身近にあれば利用したい施設やサービスを尋ねたところ、調査地域にかかわらず図書館が上位でした。
- ・ 一方で、図書館に何を求めているのかは精査が必要です。図書館という場所が欲しい、本に触れたい、カフェで本が読みたいなど、図書館を欲する理由は人によって大きく異なっていると考えます。

3. 豊中市立図書館

- ・ 「豊中市立図書館みらいプラン(素案)」の中で、「図書館」と表現したときに、それは蔵書なのか、空間なのか、組織なのか、サービスなのかは明確にしたほうが良いでしょう。建物としての図書館と仕組みやシステムとしての図書館は分けて考えることが望ましいと思います。
- ・ 伊勢神宮の式年遷宮では、20年に一度社殿を新調します。すべてを新調することで技術が継承されると言われますが、実は少しずつ変えているそうです。伝統や歴史などは少しずつ変えていくことが重要だと思います。

●持続可能なものは、いつの時代も、時代によって少しずつ変わる。

【伊勢神宮の式年遷宮】

- ・ 伊勢神宮の社殿と神宝を、20年に一度新調することで、「永遠に変わらないお祭りが行われる」
- ・ 1300年以上続く伝統



- ・ 「みらいプラン(素案)」の中には「新しい・・・」という表現が多用されていますが、劇的に変えるのではなくバージョンアップするという意識が大切だと思います。

1. これからの公共施設

- ・ 公共施設の再編が自治体の全国的な課題となっています。
- ・ 社会が求める用途の変化のスピードと建物の寿命のスパンにずれが生じてきているため、社会のニーズに合わせて建物を変えていくことが求められています。

公共施設の再編

- ・ 2000年頃から、将来的に公共施設の維持管理だけで財政が破綻しかねないため、公共施設のあり方を見直していこうという動きが出始めました。先進的な自治体で公共施設の見直しが進む中、豊中市は単なる縮小や削減ではなく有効活用していくことを選び、豊中市市有施設有効活用計画を2011年に策定しました。
- ・ その後の計画などを見ても、今ある施設の機能や用途を見定め、一部は拠点化しつつも、一部は縮小するといった豊中市の姿勢や考え方がうかがえます。
- ・ 2017年に、竣工直後の文化芸術センターで公共施設等総合管理計画についてのフォーラムがあり、2041年度までに公共施設の延床面積を80%に削減するという案が提示されました。ここでも一律削減するということではなく、文化芸術センターを文化芸術活動の拠点とするという考えが背景に見られます。
- ・ 公共施設の面積もサービスも2割減ということではなく、メリハリをつけることが必要だと考えています。

多機能化と余白

- ・ グリーンスポーツセンターには温水プールがありましたが、2020年に解体され跡地は広場になっています。今ではスポーツ観戦や散歩のほか、この広場などではラジオ体操、朝市、音楽の演奏会、防災イベントなど多様な活動に利用されています。
- ・ プール跡地の使い方については利用しながら計画するといった、従来の建築計画とは違ったプロセス

第2部【パネルディスカッション】 豊中らしい新しい「図書館」について

進行：伊丹康二さん
(武庫川女子大学准教授)

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了。豊中市政研究所(現・とよなか都市創造研究所)研究員、大阪大学大学院助教を経て、現職。研究テーマは、公共施設の再編手法、郊外住宅地の住環境整備手法など。



パネリスト：豊田高広さん
(フルライトスペース(株)特別研究員)

1981年、静岡市役所任用。1994年、市立中央図書館配属。開設準備ののち館長を務めた市立御幸町図書館は2007年、LIBRARY OF THE YEAR 優秀賞。2010年、愛知県田原市中央図書館長(公募)。2019年から現職。図書館計画策定・運営、人材育成等を支援。



パネリスト：天瀬恵子さん
(豊中市立図書館協議会委員)

地域で子どもと本をつなぐ「子ども文庫」を主宰。本を介した親子の居場所づくりのほか、幼稚園や小学校でのおはなし会にも携わる。豊中子ども文庫連絡会や大阪府子ども文庫連絡会の役員を歴任。ブックスタート事業など、豊中市の子ども読書活動の推進に関わっている。



パネリスト：須藤有美
(教育委員会事務局読書振興課長)

1987年、豊中市に採用、庄内図書館長等を経て、2019年より現職。児童サービスから障害者サービス、子ども読書活動推進計画実施計画策定やボランティア支援などの業務に関わる。日本図書館協会認定司書2048号。



1. 近年の他都市における図書館について

豊田：他都市での図書館づくりの支援をこれまで多く行ってきました。近年、図書館の真ん中によく大きな階段がつくれます。移動するためだけではなく、人が行き交い、つながり、新しいものが生まれてくることを期待して広場のような使われ方をします。大階段は象徴的な例ですが、そういった仕掛けが増えつつあると感じています。私自身が関わった例として、豊橋市のまちなか図書館と鹿児島市の天文館図書館があるので、本日はその共通点を5つ紹介したいと思います。

- 1) 従来と大きく異なるタイプの分館だが、大型の中央館を中心としたシステムの存在を前提としている。
- 2) 商業施設内を歩いているといつの間にか図書館の書架の間にいる“まちなか”の図書館というイメージ。
- 3) 中高生や子育て世代、社会人など従来の利用者と異なる層の取り込み。人との出会いから課題の発見や解決、自己実現につながれるよう工夫されている。
- 4) 資料をテーマ別配架で配列することにより、新しい市民の活動が始まっていくことを意図している。
- 5) 交流や活動の空間がたっぷりとられており、その余白を使って利用者が新しい関係性を生み出す。大階段はそのシンボルである。

2つの「まちなか図書館」の共通点(まとめ)

- ①図書館網、特に大型の中央館の存在を前提に、振り切った挑戦
- ②中心市街地の活性化を企図し商業施設等と融合
⇒「まちなか図書館」のネーミング
- ③新たな利用者開拓⇒出会い×会話×つながる⇒多彩な市民活動
- ④十進分類法による配架から市民活動を刺激するテーマ別配架へ
- ⑤交流・活動の空間をたっぷり、所蔵資料数は抑制。コレクションよりコネクション。
「大階段」は、そのシンボルでもある。

須藤：人が近くを歩き、何をしているかが見えるのが良いですね。今の豊中の図書館には、何にでも使えるスペースがありません。

天瀬：こういう使い方をしたいと思い、利用する人が考えられるのは素敵だと思います。うちもテーマ別配架をしていて、利用者との話も広がります。

豊田：まちなか図書館は集会などに参加している人以外への見せ方を相当意識しています。利用者が活動のルールを考えられるような仕掛けをしている事業もあります。

伊丹：大階段はいつどのような検討を経て決まったのでしょうか。

豊田:そういうものがあればいい、くらいの段階から始まりました。想定は必要ですが、むしろ想定を覆すことのほうが面白い、といった考え方だったと思います。

伊丹:中央図書館やまちなか図書館以外は、何か特徴がある図書館ですか。

豊田:まちなか図書館以外の図書館は従来からある、身近な本に親しめるかたちだと思います。まちなか図書館のようなものをやろうとすると、運営側にファシリテーター的なセンスも求められます。

須藤:そびえる書架は事例としてありますが、豊田さんはそれが利用者にもたらす影響や意味について考えはありますか。

豊田:否定はしませんが、圧倒的な知の殿堂のようなものより広場的なものの方が新しい活動が生まれやすいと感じています。

天瀬:利用者はどんな人なのでしょう。また、どのように図書館づくりに関わったのでしょうか。

豊田:豊橋は基本構想の段階からイベントや広報誌を通じて市民との意見交換を行っていて、それは今も続いています。鹿児島は完成してから市民発で新しい使い方を考えて実現する企画に関わりました。市民に呼びかけたところ20~40代を中心に集まったのです。余白のある箱だからこそ完成後にも議論ができるのだと思います。

伊丹:20~40代が多かったのはなぜでしょうか。

豊田:特に戦略的にPRをしたわけではなく、コロナ禍で人とのつながりが求められていて、一緒に何かする人を探したかったという声が多かったので、ニーズにはまったのだと思います。

須藤:目的を持たない余白の部分を持たせるというのは、どういう方法で周りを納得させていったのでしょうか。

豊田:最初から市民の交流の場をつくりたいと謳われていたので、それに対する答えとして受け入れられました。

伊丹:天瀬さんは、もしこのような広場や交流の場が図書館にあったとしたら、どのような使い方をイメージされますか。

天瀬:難しいですが、たとえば外国の言葉で絵本を読み聞かせするおはなし会があります。そういうものを外から見ることによっていろいろなつながりができるのではないのでしょうか。

伊丹:オープンな場所で行われ、誰でもちらりと見ることが出来る集会やイベントは、その意味合いも変わってくると思います。公共には「オフィシャル」「コモン」「オープン」の3つの要素があると言われていますが、最近の公共施設には「コモン」や「オープン」が重要視されていると感じています。

2. 豊中の図書館で大切にしてきたこと、これから大切にしたいこと～市民の立場から

天瀬:豊中の図書館で大切にしてきたことと、これから大切にしたいことについて、市民の立場から4つの内容を提供したいと思います。

- 1) 1945年に岡町図書館ができ、1970年代に身近な図書館が欲しいとの市民の運動に応じて図書館を充実させてきた。中心となる地域館は、ビジネス・就労(千里)、医療・健康情報(岡町)、子育て・DV(野畑)、多文化共生(庄内)といった情報に特化しており、高度なサービスを提供するとともに、情報発信の場やコミュニティの核として重要な役割を担っている。
- 2) 2001年に国の子どもの読書活動に関する法律、2005年に豊中市子ども読書活動推進計画が策定された。その後、連絡協議会が発足し、本に触れ本とつながる環境が大切であるとの理念のもと活動していった。定期的の実績を評価し次につなげた。このような取り組みで、縦割りの行政が横につながり、そこに市民もつながった。図書館を中心としてつながったのである。
- 3) 市民と行政が知恵を出し合って一緒につくっていくのが参画であり協働である。分かってもらえるよう説明する、意見を聞くというのは参画ではない。
- 4) 生活の中の図書館を大切にしたい。読みたい本がある、欲しい情報が得られる、課題を解決できる、人と出会える、つながれる、ほっとする。豊中市立図書館の基本目標に「教育と文化の向上に貢献し、人権を尊重するまちづくりをめざします」と掲げられている。教育、文化は人権と結びついている。すべての市民の「わたしの図書館」であるために、強い人の理論ではなく弱い人にこそ寄り添うことが必要ではないだろうか。

◆きめ細かなサービス

特色ある4館体制

◆理念と実践と評価

子ども読書活動推進の10年

◆市民参画と協働

豊中子ども文庫連絡会との協働 ブックススタート事業えほんはじめまして図書館を創る・野畑図書館 東豊中図書館 新千里図書館・公民館創造会議 学校図書館への司書配置 「豊中の図書館活動」の見直し 市民職員合同研修

◆すべての市民の「わたしの図書館」

生活の中に図書館がある環境

須藤:子ども読書活動には私も関わっていて、障害のある子どもと外国人の子どものワーキンググループの中の調整を市民に助けられながらやってきました。このときつながった連絡会との関係は今も続いています。

豊田: 徹底的に議論する時間は大切だと思います。

天瀬: 中心になったのは市民で、すべての子どもたちに良い読書環境をという思いのもとで話し合いを重ねて実現しました。

豊田: 意見が対立する場面もあったのではないのでしょうか。

天瀬: 行政も教育機関も市民も同じ目標に向かっていたので、議論をしながらも良いものをつくるという思いは共通していました。

豊田: 本音で議論できる関係をつくることは難しいです。行政も市民も立場にこだわって、なかなか前へ進まないことはありませんでしたか。

須藤: 子ども文庫や豊中子ども文庫連絡会との協働から活動が始まって、一緒に本の集いや祭りを行った。市の配本制度につながったりと交流はありました。

豊田: ある図書館の話ですが、館長と市民団体との関係が冷えたものになっていました。1年ほど団体と話し合いを続けた結果行くべき方向が見えたので、原点へ戻ることを提案して関係が改善したことがあります。

伊丹: 市と市民で理念を共有しなければ協働は生まれないと思いますが、須藤さんはすべての人の「わたしの図書館」と言ったときにイメージはありますか。

須藤: 「わたしの図書館」が人それぞれ違うところが図書館の強みでもあり難しさでもあります。図書館が持つリソースの活用スタイルが「わたしの図書館」のバリエーションではないでしょうか。こんな使い方をしたい、こんなイメージがある、といったアイデアの共有をしたいと思っています。

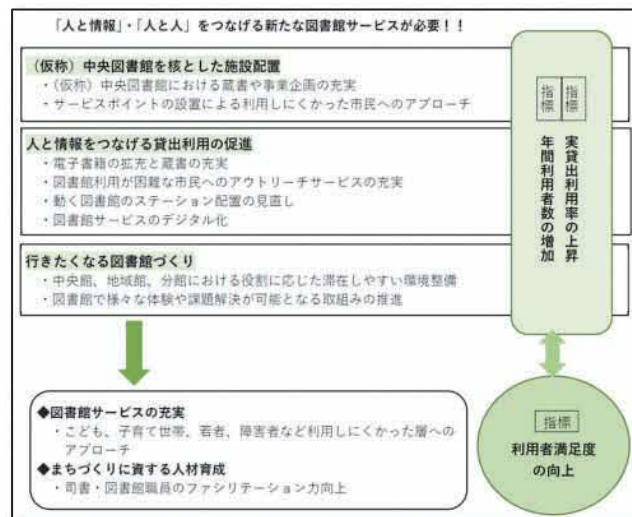
3. 豊中らしい新しい図書館について

須藤: 「つながる。わたしの図書館で。」という基本コンセプトは、図書館の職員たちがこれまでの取り組みを踏まえて考え出したものです。市民が図書館を利用することで図書館も司書も育てられると強く感じています。図書館はさまざまなスタイルで利用されています。図書館に出向けない人については、資料や情報を自宅などにお届けして生活の役に立ててもらっています。コロナ禍で来館が難しくなったときには、リモートで対面朗読を行うこともありました。図書館の使われ方はどんどん変化しています。

市民にどのように利用してもらうのか、来館なのか非来館なのか、図書館なのか動く図書館なのか。そのあたりを俯瞰して考えていくのが「みらいプラン(素案)」です。全く新しいことというよりは、既にやっていることをもう少し頑張る。本を借りない方も含め、図書館に足を踏み入れた利用者がどのくらいいるのか、年に1回以上本を借りた方がどのくらいいるのか。そういった指標を経年的に把握しながら、図書館を使って良かつ

た、生活の役に立ったと満足感を高められるよう進めていきたいと考えています。

図書館の職員は、地域の課題を見出したり解決したり、ファシリテーターとしての能力をはじめとするさまざまな専門性が求められています。ご説明させていた資料に「人材育成」とあるのは、私たちはこれまでにないようなことも学んでいくという姿勢を表したものにになります。



天瀬: 図書館は市民のものです。図書館側からこうするという一方的な提案ではなく、実現するプランがこれで良いのかと市民と一緒に考えることこそが参画であり、つくっていくという過程だと思います。理念は素晴らしいですが、聞くだけ、説明するだけでは不十分ではないでしょうか。対話でないと意味がないのにその機会がありません。

豊田: 豊中の図書館は市民と職員が一緒に進めるというやり方でなければ実現は難しいと感じています。理念に見合った指標はもっと考える必要がありますね。

伊丹: 目標を立てる、未来像を考えるといったことは評価指標をつくるということでもあります。市民と市が話し合うことで、歩むべき目標像ができるのではないのでしょうか。

まとめ

伊丹: 豊田さんから提供されたテーマでは、特徴のある図書館や新しい図書館サービスネットワークを考える、地域館や分館の特徴を見だしていくことが空間的にも運営的にも大切ではないか、といった内容について意見を交わしました。

天瀬さんと須藤さんのテーマをまとめると、何をめざすのか、どのような状態になれば達成できたといえるのかといった指標づくりも含めて、市民と市が理念を共有してはじめて構築的な協働になるということかと思いました。